



チェルノブイリでは、放射性物質の大量放出を防ぐために、爆発した原子炉を封鎖する石棺作業が早急に行われた。石棺の耐用年数は30年間と推定されたが、現在、約1500㎡の表面のいたる所に多数のひびが見られ、非常に深刻な状態にある。これらの亀裂からは汚染された塵・ガス・水が漏れ、原子炉の下部からは放射性物質が浸透漏出、立入禁止区域に埋められた5億トンの高レベル放射性廃棄物、事故時に大地に堆積した放射性核種と共に許容量の最大400倍の放射能レベルでプリピャチ川に流れ込む帯水層を汚染する。川はドニエプル川を経て黒海に到着し、地中海に溢れ出て、海水を汚染する。

今日でも、石棺内には放射性物質が180トンも存在している。もし、石棺が崩壊すれば、大量の放射性塵が大気中に放出される。更に深刻な脅威もある。4号炉の廃棄物にある核燃料の熱化学的な反応が重大な濃縮につながり、突然の温度上昇からの反応により爆発が生じる可能性がある。

石棺内部には、「象の足」と呼ばれる、隆起した金属の塊がビル数階分の高さで存在している。それは爆発熱で溶解した炉心の残骸を含んでおり、ウラン・プルトニウム・セシウムなどの放射性同位体が存在している。この巨大な金属の融合物は、20年以上にわたって高濃度の放射能を内部的に浴び続けて塵化しており、いつ崩れだしてもおかしくない。

86年4月26日にプリピャチに住んでおり、今、チェルノブイリの清掃作業人 ウラジミールはこう述べている。「4月27日に軍隊が突然やってきて、すぐに戻るようになるから、荷物は置いたままに、しかし、私たちは二度と戻りませんでした。家族や多くの友人が腫瘍で命を失いました。わたしはまだ生きています。でも、自分が何故生きているのか、分かりません。この汚染地域で暮らすことは、時限爆弾の上に座っているようなものです。いつかそれは爆発します。しかし、それがいつかは決して分らないのです。石棺もいつ崩壊してもおかしくない状態です。私はチェルノブイリの事故を生き延びました。それがどのようなものであったかを知っています。それでも、多くの人と同様、この核の悲劇が本当に何を意味しているのかは理解できないままです。私達に何ができるのでしょうか、何もありません。私達はただ、もうひとつのチェルノブイリが起きるのを待つだけなのです。世界の人びとはどうするつもりなのでしょう？ 私達と一緒に、それを待つつもりなのでしょうか？」

『Chernobyl : The Hidden Legacy』 2007.04.26

『原発事故 20 年 - チェルノブイリの現在 - 』

ピエルパオロ・ミッティカ(著) / 児島修(訳) 柏書房 2011.11.10 page.066 ~ 067 より抜粋

Home - pierpaolo mittica - <http://www.pierpaolomittica.com/>